



熱血！
電装整備

有限会社 シンコーエンジニアリング（埼玉県加須市）

代表取締役 小鮒 巧氏

12V から 24V。建機から輸入車。 電装整備から車検、診断整備、 そして足回り整備まで。 電装整備の枠を超え、異彩を放つ、 超オールラウンド整備工場！

創業から半世紀を迎えるシンコーエンジニアリングは、今や電装整備の枠を超え、カーアフターマーケットの中でも高い技術が求められる領域に足を踏み入れた。小型と大型の認証工場を持ち、建機から輸入車、電装整備はもちろん、車検、診断整備、足回り整備をこなす。将来的にはアライメントテスターを導入する計画に加え、エイミングの仕事も視野に入れる。超オールラウンドな整備工場を率いる小鮒巧社長のリーダーシップが自動車整備に新たな道を示した。

チャレンジングな方向性で 異彩を放つ電装整備業に

道路拡張によって、本年3月21日に本社を移転させたばかりの(有)シンコーエンジニアリング。電装整備事業者のイメージとは違う、まるでモデルハウスのような新社屋が壮観だ。昭和42年10月、小鮒巧社長の父上が創業して以来、

確実に、そして着実に会社の規模を拡大させていった。それは、サービス工場の広さだけでなく、整備の領域も然りである。伝統的な電装整備事業者だった創業時から見れば間もなく迎える、この半世紀の間に、いかに同社が変革してきたか。それは、まさに進化である。創業者の小鮒社長が土台を作り、その土台の上に築きあげたのが、

13年前に父の急逝によって二代目社長に就任した小鮒巧社長である。そのチャレンジングな経営によって、シンコーエンジニアリングは極めて異彩を放つ電装整備工場に成長した。

ロールスロイス、メルセデス、 輸入車整備に活路

大学を卒業した小鮒巧社長は、

☆ 同社半世紀の軌跡。創業社長が造った土台を、2代目社長は会社の方向性を明確にした。



3月21日にオープンした、シンコーエンジニアリングの新工場。敷地面積は600坪。



本社社屋全景。茶色と白のツートンの素敵な建物である。



フロントの風景。エレガントな雰囲気仕上げた。

日野自動車に入社、エンジン開発のエンジニアとして9年を過ごした。

「父は戻ってこいとは一言も言いませんでした。けれど、後継者がいないがために、父の会社を潰すわけにはいきませんでした」と小鮎巧社長は当時を述懐する。だが、1年間、海外修行することを条件に、同社への入社が決まった。小鮎巧社長、30歳のときである。海外修行はカナダに渡り、ワーキングホリデーを取得、自動車整備士の学校に通いながら、様々な職種を経験した。帰国後、シンコーエンジニアリングの後継候補として

正式に入社した。

その後数年間は、入社を後悔したという小鮎巧社長だが、「やるからには、事業を拡大したい」と、現場の作業と並行して、これまで同社でほとんど行ってこなかった営業を展開。顧客の掘り起こしを行い、これが少しずつ身を結んでいく。整備工場はもとより、建設機械のリースなど、少しずつ仕事を拡大させた。とりわけ、転機になったのが、大型車と輸入車の整備である。前者は宅配便大手企業からの依頼。架装を中心に、今では分解整備も請け負う。新拠点に移転したのを機に、大型の認証も

取得した。

「運送事業者からのお仕事をいただくうちに、整備の領域の仕事も増えてきました」と小鮎社長。また、輸入車では、ロールスロイス、ベントレーのディーラーからの仕事に加え、平成25年には、輸入車整備の「ボッシュ・カーサービス」に加盟し、輸入車の入庫は格段に増えた。また、欧州メーカーの日本法人の新規検査にスタッフを派遣する関係を築いたことから、スタッフのスキルも上達し、同社において輸入車整備はひとつの目玉になった。



☆ 小型から大型、建機から輸入車。車検、診断整備、足回り。 超オールラウンドのかかりつけ医。



サービス工場。大型と小型、それぞれ認証工場を取得した。



ボッシュの診断機を設備。サスペンションテスターとブレーキテスト。足回り整備に力を注ぐ。将来的には四輪アライメントテスターの導入も視野に入れる。



大型のみならず、小型、更にはマニアな輸入キットカーが入庫していた。

診断整備、足回り整備、 そしてエイミング

「ボッシュ・カーサービス」への加盟が、同社をひとつ上の高みに上げたことは間違いない。輸入車を扱うブランド力とメカニックとしてのプライドが同社の雰囲気を明らかに変えている。先述したように欧州車の新規検査の仕事をスタッフが3ヶ月間、ローテーションで回するため、診断技術のレベルは一様に高い。

「今、出張する仕事の半分は故障診断機を伴う仕事です」と小鮎巧社長。複雑化する診断整備によって、整備の作業時間も長くなる傾向にあり、ディーラーからの仕事は増加している。「ディーラーも人手が不足しており、オーバーフローになっています。難度の高い仕事が増えています」（小鮎社長）。診断整備とともに増加しているのが、足回り整備。宅配便企業の車両をはじめ、埼玉県内でも3機しかないというサスペンションテ

スターの需要が高まっている。最近、入庫したゴルフは、フロントガラスの脱着によって、ホイールアライメント調整が求められたケースがあったという。同社では将来的に四輪ホイールアライメントテスターを導入し、本格的に足回り整備を行っていく構えである。

シンコーエンジニアリングは、建機から輸入車、そして電装整備や分解整備だけでなく、診断整備に足回り整備という極めて特異なスペシャリティショップとして、

光を放ちつつある。

横浜トヨペットの
ウエイズグループの協力店に

同社が目指すのは、クルマのかかりつけドクターという立ち位置であるという。

「車検を安価で行うカー用品店は多くなったけれど、修理で困ったとき、気軽に相談できる場所がないというケースが増えていると思います」と小鮎巧社長は語る。シンコーエンジニアリングは、そういったユーザーの受け皿としての存在を目指したいという。先述したように、同社の顧客は主に整備工場やディーラー、リース会社に運送会社だが、近年はエンドユーザーとの関わりが多くなっている。かかりつけ医として、工場近隣のユーザーや輸入車ユーザーなど、高難度な整備の駆け込み寺として認知度を上げてきた。同社は認証を受けているため、希望のユーザーには車検も実施する。もちろん、元請けの整備工場やディーラーと競合する目的ではなく、あくまでもユーザーの希望がある場合だけである。

将来的には、顧客に占めるエンドユーザーの割合を「5割まで引き上げたい」（小鮎社長）との目標を掲げる。電装整備はもちろん、高度な診断技術、輸入車整備、そして足回り整備、更には将来の目標のひとつとして、エイミングの実施も視野に入れている。こうした専門的な得意分野を伸ばしながら、整備工場やディーラー、そしてエンドユーザー双方から頼りにされる整備工場が目標だ。

会社の方向性を示し、
若い人材が相次ぎ入社

企業の方向性がしっかりと定

☆ 自動車整備にインテリジェンスを与えた 兄貴肌の社長に若い人材が集う。



テスター、整備機器、ツールボックスがきれいに並ぶ。道具を大切にしている様子がうかがえる。



出張などのサービスカー。
奥から2台目の軽バンはオイル交換専用の出張サービスカー。



4月9日。取引業者などを
招き、オープンイベントを
開催した。

まったことから、同社の門を叩く若者が増えている。今春より、19歳男性の新入社員が新たに加盟した。未経験ではあるが、長期的な視点で育成していく構えで採用したという。また、今夏には36歳の男性を中途採用することで内定している。これによって、同社は小鮎巧社長を含め、サービススタッフは5名の布陣となる。人材不足といわれながら、若いスタッフの相次ぐ入社は、「働きたい」と思わせる環境もさることながら、兄貴

分的な小鮎巧社長の存在であろう。職人気質の経営者兼メカニックが多い電装整備工場が多い中、メーカーエンジニアの経験から、インテリジェンスあるサービス像を模索する姿が頼もしい。それよりも何よりも、とにかくクルマが好きというスタンスで楽しく仕事をする空気が会社を輝かせている。メカニックならば、「この会社に入りたい」と思うことだろう。シンコーエンジニアリングに新たな自動車整備業の方向性を見た。